広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部　第62号　2013　367－374

1960年代のイタリアにおける音楽科教育に関する研究

― 現代の教科書との比較をとおして ―

大野内　愛

（2013年10月３日受理）

A Study of Music Education of Italy in the 1960s

― Through comparisons with a present-day textbook ―

Ai Onouchi

Abstract: This paper aims to reveal the content of music education in the 1960s. The paper examines the orientation of a 1963 program that aimed to cultivate love for music and explores connections between this program and a textbook used to administer music education in real-world classrooms. Results of the examination reveal four characteristics pertaining to the textbook: (1) a focus on the study of music theory; (2) sparse connections between individual learning activities; (3) disregard for activities that deal with actual sounds; and(4) the inclusion of content focusing on the interaction of music and life. Links to the 1963 program can be seen in the inclusion of content that potentially cultivates love for music; however, broadly speaking, the textbook content tends to adopt a cognitivist approach. Although music education of the 1960s evolved as an instrument of national renewal following the collapse of fascism from 1945, the education of this period can be placed within a transitional phase toward an era, beginning in the late 1970s, during which music was seen as “a communication tool with close connections to life”.

Key words: music education, Italy, textbook, 1960s
キーワード：音楽科教育，イタリア，教科書，1960年代

１．はじめに

イタリアにおいては，1963年に中学校での教育が義務化され[1)]，教育内容を指示するプログラム[2)]が示された。そのプログラムには，音楽科が「音楽教育[3)]」という名称で含まれている。

筆者はこれまでの研究において1859年から現代までのイタリアの小・中学校における音楽科プログラムの変遷について研究し，その結果，1859年から現代までの音楽科という教科の捉え方から４つの時代に区分することができた。それによると，1963年のプログラムは，音楽科は「精神教育の手段」として考えられており，また現代のプログラムは，音楽科は「生活に密着したコミュニケーションツール」として考えられていることが明らかとなった[4)]。

イタリアにおいて音楽科が「精神教育の手段」として捉えられるようになったのは，1945年プログラム（小学校[5)]）からであり，ファシズム崩壊からの国家再生の流れを汲んでいることは明らかである。1963年プログラムではファシズム崩壊から20年近く経過しているが，プログラムの傾向としては1945年プログラムからの流れが見られた。

では，1960年代の中学校では，実際にどのような音楽科教育が行われていたのだろうか。また，このプログラ

ムに示されていた，音楽科を「精神教育の手段」とする考え方は，実際の教育にも浸透していたのだろうか。

そこで本研究では，1960年代に使用されていた中学校音楽科教科書と現代の中学校音楽科教科書を比較することにより，1960年代の音楽科教育の実態を明らかにすることを目的とする。

2．1963年プログラムの概要

1962年の立法を受けて制定されたのが，1963年プログラムである。このときは，１年生のみ音楽科は義務であり，２・３年生は任意であるとされている。

内容としては，まず「自然や日常生活の音の現象の観察を始めること」と示されており，普段の生活の中での音に耳を傾けさせる必要性を主張している。また，鑑賞活動の領域ではクラシック音楽，その中でも重要な作曲家の楽曲や，重要な形式をもつ楽曲を鑑賞することが示されている。これまでのプログラムでは鑑賞に関する文言はほとんど存在しなかったが[6]，ここで多少具体的になった内容が示されるようになった。また，音楽理論の学習の領域では，リズム練習や階名唱を行うことをとおして，音の長さや高さ，調性，旋律などについて学習することが示されている。さらに演奏活動においては，主に合唱練習を行うことが示されている。

本プログラムの目的は，音楽を言語として捉え，生徒に音楽への愛好心を引き起こすことであると明示されている。プログラムの内容を見ると，特に義務である１年次の内容において，音楽の基礎的知識が広く学習できるものとなっており，卒業後も音楽活動を行うための基礎的な内容を身に付けられるプログラムであると言える。

1963年プログラムの内容は以下のとおりである[7]。

１年生（義務）
- 自然や日常生活の音の現象の観察を開始する。
- クラシック音楽から選ばれた音楽を少しずつ鑑賞する。
- 手をたたく練習をしたり，なるべくよく知られた文や詩の単語や句にアクセントをつけたりして，集団でリズムを練習する。
- クラシックのレパートリーや，民衆の音楽に使用されている作品を，模倣により合唱練習する。
- 声域を知覚するとともに，長さを含む音の高さを知覚する。

２年生（任意）
- 代表的な作曲家の，レパートリーや図解から選択した音楽を少しずつ鑑賞する。
- １年生で習得したリズム・旋律の記譜における基礎要素の概念を拡大したり掘り下げたりする。
- 合唱の練習をしながら，変化記号，付点，スラー，その他付属するものを学ぶ。
- 適切なパーカッションを用いて，さまざまな種類の音楽で，装飾されたリズムを手でたたく。
- 音高練習と，易しい旋律の階名唱を行う。
- １声や２声の合唱を練習する。

３年生（任意）
- 音楽言語の発達に関して，重要な形式をもつと考えられるクラシックのレパートリーの音楽を鑑賞する。
- 楽器やその音色からそのものの個性を理解する。声を分類する。
- １つや，同時に２つのパートに分かれて，リズム演奏を継続する。
- 易しいカノンや２声やそれ以上の歌を歌う。
- 調性や旋律や対位法やハーモニーについての基礎知識を学ぶ。

3．教科書の構成

本研究では，以下の２組の教科書を比較の対象とする。

・*Invito alla musica*（1968）Loescher 出版[8]

・*Lo spartito animato*（2006）Loescher 出版[9]

この２組の教科書を出版している Loescher 出版は，毎年約16,000部を売り上げている大手教科書出版社の１つである。

本研究においては，現代の教科書と1960年代の教科書を比較するため，同出版社の教科書を扱うことが適切であると考える。したがってイタリアにおいて大きなシェアをもつ Loescher 社が出版した教科書を扱うこととする。

また，本論文では各教科書の内容を効果的に概観するため，内容を学習活動別に分類するという方法をとる。単元ごとに,「演奏」「鑑賞」「音楽理論の学習」「音楽と生活との関わり」「コンピュータ学習」の５つに分類して検討を行う。ただし，単元の中にいくつかの活動が含まれていることもあるため，分類に当たっては,「主たる学習活動」を筆者が見定め，検討を行うこととする。

（1）教科書 *Invito alla musica*（1968）の構成

本教科書は，１冊182ページで構成されている。この１冊の中に，歌唱活動や鑑賞などすべての領域が含まれている。

【第１部】

1　自然における声－鳥の歌
2　自然と音楽
3　歌うための準備
4　初めの２つのわらべ歌
5　初めの観察（縦線，五線，小節，４分音符）
6　他の２つのわらべ歌
7　ダンスへの招待（２分音符）
8　静寂を測定しよう（４分休符と２分休符）
9　LIMPIDA STELLA（全音符と全休符）
10　LA COLOMBA BIANCA（８分音符）
11　もう一度８分音符
12　GIOSTRE（８分休符）

13　NINA LA PASTORA（付点２分音符）
14　テンポの指示（小節内の拍の数，拍の長さ）
15　記譜の基礎（五線譜における音の名前と位置）
16　メロディライン
17　強勢
18　合唱（起源，単旋律，複旋律，民衆の合唱）
19　人間の声
【第２部】
20　楽器
21　楽器ギャラリー
22　リズミカルな呼吸
23　旋律の階名唱（ハ長調）
24　OH, CHE BEL CASTEL!（歌詞のエリジオーネ）（２音節を１音節で歌う技法）
25　音を読む訓練
26　音程－全音と半音
27　臨時記号（シャープ，フラット，ナチュラル）
28　長調
29　短調
30　IL FABBRO DISTRATTO（付点４分音符－タイ）
31　音程
32　再び音程
33　PRENCE TOMMASO（複合テンポ－８分の６拍子－リトルネッロ）
34　調性，調号，音階構成音の名前
【第３部】
35　16分音符
36　32分音符－64分音符
37　３連符
38　半音階
39　和音（ハーモニー）
40　テンポ，強弱，表現の主要な指示
41　リズムの対位法
42　時代の音楽　作曲家，作品，形式
歌唱曲集
鑑賞曲集
分析のための曲集
ディスクの抜粋された形式の曲

①教科書の特徴

本教科書は，内容が学習活動別に分かれてはおらず，音楽の基礎的内容の学習が基本の流れとして存在する。その中で関連する活動を含みながら，教科書が構成されている。

②学習活動別の割合

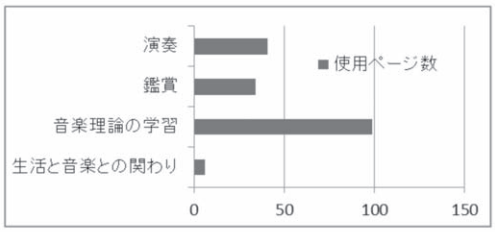

図１　*Invito alla musica*（1968）の学習活動別ページ数

図１は本教科書における学習活動別の使用ページ数である。もっとも多い活動は「音楽理論の学習」であり，次いで「演奏」や「鑑賞」となっている。また，「音楽と生活との関わり」についての学習に割かれたページ数は非常に少ない。

③学習活動別の内容

「演奏」活動は歌唱活動が中心である。演奏活動に約40ページが割かれているが，これは，教科書の巻末に曲集のように数十曲の楽譜が掲載されているだけであり，その歌唱曲で身に付けるべき能力や気を付けるべきところなどが示されているわけではない。おそらく，「音楽の理論の学習」を行いながら，関連する曲を扱うという流れだろう。曲のジャンルとしては，イタリアの国や州でよく歌われる童謡や賛歌などが主であり，フランスの歌，ドイツの歌，イギリスの歌が数曲掲載されている。また，いくつかはオペラの合唱の部分から抜き出して掲載されている。その他に，カノン用や合唱用の曲もある。合唱用の楽譜は２～３声であるが，すべての音がト音譜表で書かれており，男子生徒の存在や声域を考慮したものではない。

「鑑賞」活動で扱う内容としては，さまざまな楽器の紹介や，音楽史の学習，楽曲の形式の学習がある。しかし，この単元でこの曲を扱う，というような指示は特になく，鑑賞曲目は，歌唱曲と同様に，巻末に曲目が羅列されているだけであり，学習する内容に関連する楽曲を教師が選択するような形になっている。したがって，楽曲ごとの目的なども明記されてはいない。ただし，楽曲ごとの短い解説は掲載されている。

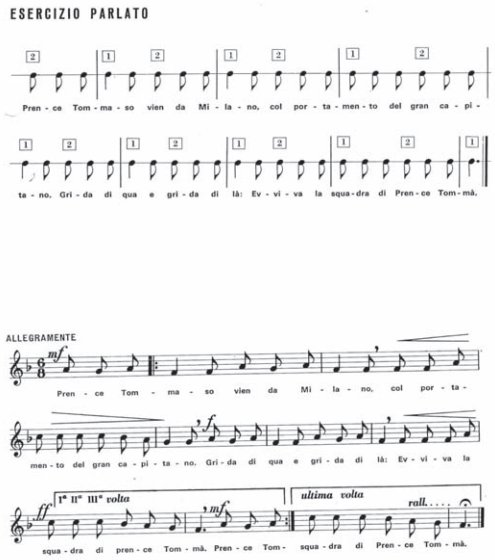

図２　歌詞をリズム読みさせている例[10)]

「音楽理論の学習」という活動が，本教科書の中で

最も重要な部分といえる。本教科書自体が，音楽理論の学習を中心に構成されている。音楽理論の学習の手立てとしては，リズムを叩くこと，階名唱や歌唱を行うことがほとんどである。４分音符の学習から徐々にレベルアップしていくのだが，各音符の音価を理解させるために，歌詞のリズム読みから始めていることは，特徴的である（図２参照）。

音楽理論の学習の内容としては，五線譜，音符の音価，付点，小節，階名，拍子，音程，変化記号，調性，音階，和音，表情記号，対位法，楽器の名前，演奏形態，音楽史が掲載されている。学習方法としては，文章による説明を読むことが特に多いが，その他に歌詞のリズム読み，リズム打ち，歌唱（階名唱，楽曲），筆記，作曲などがあり，１つの単元についても，さまざまな方向から理解へとつなげていることがわかる。

図３の例は，話す階名唱（Esercizio Parlato）の練習のための楽譜で，音高をつけずに階名でリズム読みをするものである。ただしこの楽譜の場合は，音符の音価が明記されていないため，階名を瞬時に判別するための練習であることがわかる。

図４の例は，和音の筆記問題の例である。左端は解答例であり，真ん中と右端は示された和音を書く練習である。

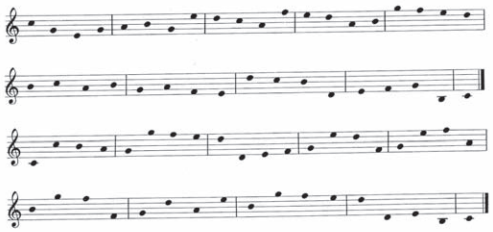

図３　話す階名唱（Esercizio Parlato）の練習の例[11)]

図４　和音の筆記問題の例[12)]

しかし，音楽史や楽器の名前などの学習では，文章や絵による説明のみで済まされている。

本教科書では，音楽理論の学習を行うことが中心であり，そのための手段としてさまざまな活動をさせていることがわかる。音楽理論の学習と，演奏や鑑賞，生活と音楽との関わりとの関連は，本教科書には特に見られない。

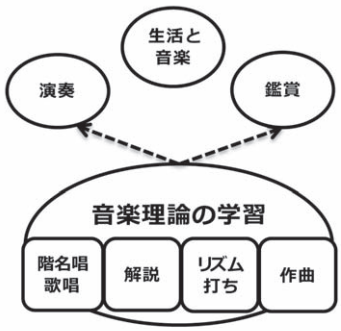

図５　*Invito alla musica*（1968）の内容

（２）教科書 *Lo spartito animato*（2006）の構成

本教科書は，Ａ・Ｂ・Ｃの３冊から成っており，Ａが277ページ，Ｂが303ページ，Ｃが280ページである。Ａ～Ｃはそれぞれテーマごとに内容が分割されている。

【Ａ】（音楽言語の理解）
単元１　私たちの周りにある音楽
単元２　音の起源
単元３　私たちの話す音
単元４　音の強さ
単元５　音の長さ
単元６　リズム
単元７　音の高さ
単元８　楽譜の読み書き
単元９　音色
単元 10　他の音符
単元 11　旋律
単元 12　旋律の伴奏
単元 13　音楽の形式
単元 14　人間の声
単元 15　気鳴楽器
単元 16　弦楽器
単元 17　打楽器
単元 18　音楽と情報
【Ｂ】（聴取経験を通した音楽的メッセージ）
単元１　音楽の起源と古代
単元２　古代の音楽：古代ギリシャと古代ローマ
単元３　キリスト教のはじまりとグレゴリオ聖歌
単元４　中世における宗教音楽
単元５　中世の世俗的な音楽
単元６　ルネサンスの世俗的な音楽
単元７　ルネサンスの宗教音楽
単元８　音楽劇の誕生と発展のはじまり
単元９　バロックの宗教音楽
単元 10　バロックの器楽曲
単元 11　古典派の音楽
単元 12　1700 年代の作品
単元 13　ロマン派の音楽
単元 14　ロマンオペラとベリズモオペラ
単元 15　音楽の国立学校と印象主義
単元 16　20 世紀と 21 世紀の間の音楽の可能性
単元 17　ジャズ
単元 18　軽音楽
単元 19　世界の，ヨーロッパの，イタリアの民族音楽
【Ｃ】（声楽・器楽の練習）

第１章　音楽の初めの第１歩
第２章　一緒に音楽をするためのチャンス
第３章　曲集

①教科書の特徴

本教科書は，A・B・Cの３冊に分かれており，Aは「音楽言語の理解（Conoscere il linguaggio musicale）」ということで，主に音楽の基礎的知識を学習するものになっている。Bは「聴取経験を通した音楽的メッセージ（Messaggi musicali attraverso esperienze d' ascolto）」ということで，鑑賞を中心として，音楽史，音楽の形式などを学習するものになっている。Cは「声楽・器楽の練習（Pratica vocale e strumentale）」ということで，声楽や器楽での実技が主となっている。

この教科書の単元の始まりには，主題の内容や到達目標を明らかにしている。その単元に関連した話題や楽曲の紹介だけでなく，DVDなど映像の紹介もなされている。鑑賞曲についても多くの譜例が示されているが，これは生徒たちに楽譜に慣れさせるための方法である。

②学習活動別の割合

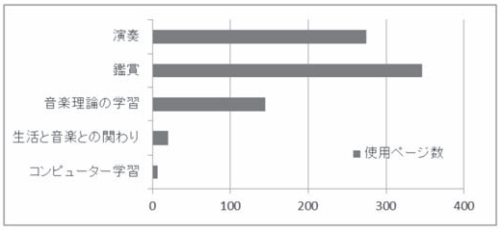

図６　*Lo spartito animato*（2006）の学習活動別ページ数

図６は，本教科書の学習活動別の使用ページ数である。もっとも多い活動は「鑑賞」であり，次いで「演奏」にも多くページが割かれている。「音楽理論の学習は「鑑賞」の約半分くらいである。そのほかに「音楽と生活との関わり」の学習や「コンピュータ学習」が含まれている。

③学習活動別の内容

「演奏」活動には，歌唱活動だけでなく，器楽活動も含まれている。扱われている楽器は，鍵盤楽器，ソプラノリコーダー，ギター，打楽器の４種類である。学習の方法としては，まず声の出し方，楽器の音の出し方のレクチャーをしており，そのあと，１音ずつ，声や楽器を使って音を学習しながら進んでいく。たとえば，「シ・ラ・ソの音を学ぼう」の単元では，この３音についての各楽器の運指などを学習した後（図７参照），この３音で成り立っている楽曲や練習曲を演奏するという流れである。

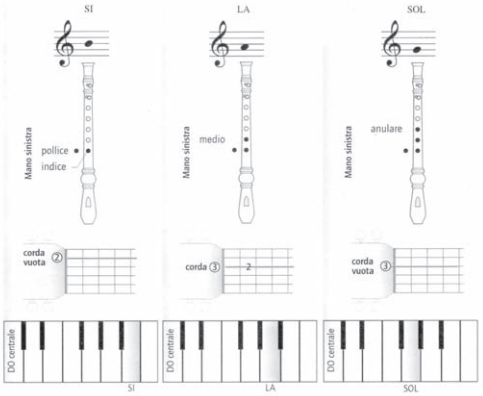

図７　３つの音について３つの楽器の運指を示している例[13)]

その後，多くの楽曲が掲載されており，特に合奏（合唱）曲が多くみられ，各曲についての詳細な解説もある。また，合奏用の曲の主旋律は，歌でも楽器でも担えるように書かれており，その旋律が多声部に分かれているものもある。曲種としては，ポピュラーソング，イタリアの民謡，外国曲，映画音楽，世界の国家，クラシック曲が掲載されている。

「鑑賞」活動は本教科書の中で最も多くのページ数を割いている活動である。鑑賞によって学ぶ内容としては，合唱の演奏形態，楽器の音色，音楽史，音楽のジャンル，世界の音楽についてである。鑑賞曲については１曲ずつ詳細な解説がついており，また必ず確認問題が掲載されている。

楽器の音色の学習の部分では，各楽器の音の出る仕組みや歴史などにも触れ，図や写真，解説などにより詳しい内容を学習することができる。

音楽史の学習の部分では，世界やイタリアの歴史にも詳しく触れ，歴史上の出来事と音楽の関連性について重要視している。

「音楽理論の学習」の単元としては，音の強さ，音の長さ，リズム，音の高さ，楽譜の読み書き，音色，音符の音価，旋律，伴奏，音楽の形式について学習するようになっている。また鑑賞活動や歌唱活動を挟みながら，単元ごとに学習できる構成となっている。そこで紹介されている楽曲は，その単元の内容を定着させる目的にとどまらず，音楽的に重要な作品を扱うことが多い。さらに確認テストが単元ごとに掲載されていたり，楽譜を書く練習をさせたり，作曲をさせたりなど，さまざまな方向から理論の習得を目指している。

「生活と音楽との関わり」の部分は，ページ数とし

てはさほど多くないが，音の伝達方法や聴覚器官の仕組み，音楽による治療（音楽療法），イメージと音楽との関わりなど，生活と関連する音や音楽について説明している。

「コンピュータ学習」はステレオなどの音楽鑑賞用機材の紹介から始まり，楽譜を入力するソフトなど音楽に関するソフトウェアの紹介を行っている。また，そのプログラムの活用の方法についても掲載されており，各学校にソフトウェアがあれば，実習を行うことも可能となっている。

本教科書は，主に演奏，鑑賞，音楽理論の学習などの活動によって成り立っているが，その１つ１つの活動が関連性をもっている。また，コラムなどの多用により，どの活動においても，人間の生活や人生との関わりについて触れられており，中学校卒業後も音楽と関わり合って生きていくための記述も多くみられる。また，音楽以外の芸術（絵画や詩など）についても触れており，本教科書で学ぶことにより，幅広い知識が身に付けられる。

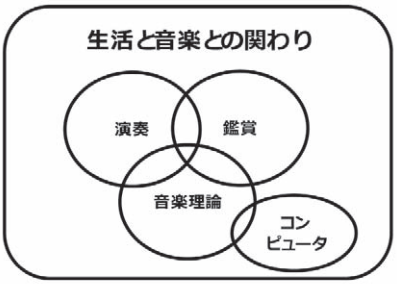

図８　*Lo spartito animato*（2006）の内容

４．教科書の比較

1968年出版の *Invito alla musica* と2006年出版の *Lo spartito animato* を比較する。この２つの教科書はイタリアで大きなシェアをもつ Loescher 社が出版したものである。

まず教科書の内容を全体的に概観すると，現代の教科書は「生活と音楽との関わり」が中心となっており，演奏，鑑賞，音楽理論の学習など，どの学習においても音楽と生活との関わりをしっかりと紹介している。それに比べて，1960年代の教科書は，音楽理論の学習が中心となっており，教科書の単元を見ても，音楽理論の学習については連続性があり，系統的に掲載されているが，演奏や鑑賞の活動はその理論とほとんど関連していない。

次に，学習活動別の比較を行う。

まず「演奏」活動については，現代の教科書は扱う楽器が多い。それに比べ，1960年代の教科書では扱う楽器は打楽器のみである。これは，当然ながら単なる時代的な問題である。日本においても現代では１人１人がリコーダーや鍵盤ハーモニカを購入することは当然のことであるが，50年前にそのようなことはなかった。1960年代においては，歌唱活動やリズム打ちが主な演奏活動であったことがわかる。また，1960年代の教科書にも現代の教科書にも，非常に多くの演奏曲の楽譜が掲載されている点は共通している。しかし，現代の教科書には１曲１曲の解説や歌い方などが詳細に説明されているのに対し，1960年代の教科書では，曲が掲載されているにとどまり，それ以上の詳しい説明はない。したがって，1960年代の教科書においては，歌唱することの目的や目標がまったく明らかではない。

「鑑賞」活動に焦点を当てると，現代の教科書ではこの活動が最も重要視されており，非常に多くのページ数を割いていることがわかる。１曲ごとに非常に詳細な解説が掲載されており，確認問題までついている。しかし1960年代の教科書では，鑑賞活動はさほど多くなく，また学習内容と鑑賞曲の関連性を明らかにしていないばかりか，その楽曲を鑑賞することの目的も明記されていない。

「音楽理論の学習」の活動では，現代の教科書においては，有名な歌曲やオペラの音楽など音楽的に重要な楽曲を使用しての演奏活動や鑑賞活動と絡め，音楽活動と関連させながら学習を進めている。それに対し1960年代の教科書では，歌詞のリズム読み，リズム打ち，歌唱（階名唱，楽曲），筆記，作曲など，さまざまな方向から学習を進めているが，その単元の学習内容の理解にとどまり，あまり重要な楽曲を扱っていない。つまり，現代の教科書の場合は，音楽的に重要な楽曲を理解したり楽しむことを目的として音楽理論の学習を行っているが，1960年代の教科書は，音楽理論そのものを学ぶために簡単な楽曲を使用していることがわかる。

「生活と音楽との関わり」の活動については，どちらの教科書も扱ってはいるが，現代の教科書では，生活と音楽との関わりに関する単元以外にも，あらゆる単元でコラムなどを用い，生活や人生に関わる内容を掲載している。それに比べ1960年代の教科書では，生活と音楽との関わりに関する単元でのみ，この内容を扱っている。

「コンピュータ学習」の活動は，現代の教科書でしか扱われていないが，これは，時代的な問題である。現代の IT 化に伴い，音楽の教科書においてもコンピュータ学習が行われている。

5．考察

本論文では，1960年代に使用されていた中学校音楽科教科書と現代の中学校音楽科教科書を比較することにより，1960年代の音楽科教育の実態を明らかにすることを目的とした。

1963年プログラムでは，音楽への愛好心を引き起こすことを目的としており，音楽の基礎知識を広く身に付けられるような内容となっている。音楽を教育するというよりは，音楽という手段を用いて教育する傾向にあり，筆者のこれまでの研究によると，1945年プログラムから続くファシズム崩壊からの国家再生の流れを汲んでおり，精神教育の手段としての役割が強いことが明らかとなっている。

このプログラムの傾向が，実際の教育現場の教育手段である教科書にどう反映されているのか，もしくは反映されていないのかということを調査し，1960年代の音楽科教育の実態の一端を解明するために，1968年の教科書を概観した。またその特徴をより見い出しやすくするために，現代の教科書との比較を行った。比較するために，同じ出版社から出版されている1968年の教科書と2006年の教科書を扱った。また，本出版社はイタリアでも大きなシェアを占める出版社である。

その結果，1960年代の音楽科教育の内容について，以下のことが明らかとなった。

まず１点目は，音楽理論の学習が中心であるということである。教科書の構成を見ても，音楽理論の連続的な学習が主であり，その他の学習活動については，音楽理論の学習の流れとは別に扱われている。音楽理論の学習で扱われる学習内容自体は，現代のものとほとんど差異はなく，基礎的な内容をじっくり学習している。また，解説のみの内容もあれば，歌唱やリズム打ち，作曲など，さまざまな活動を伴っているものもあり，あらゆる方向から音楽理論を学ばせようとする傾向にある。

２点目は，学習活動ごとの関連性が薄いことである。現代の教科書においては，音楽理論の学習と関連させて名曲を演奏したり鑑賞したりするのに対し，1960年代の教科書では違いが見られる。具体的には，前述したように，1960年代の教科書では，音楽理論を学ぶ方法として，歌唱，リズム打ち，作曲などさまざまな活動を伴ってはいるが，そこで扱う楽曲は，練習曲のようなものばかりで，つまり，音楽的に重要な作品とは言い難いものばかりなのである。1960年代の教科書では，音楽理論を学ぶときに行われる演奏等の活動は，音楽理論そのものを学ぶだけのために扱われているのであり，実際の演奏活動に関連付けているとは言い難い。つまり，各学習活動の関連性が薄く，学んでいる生徒からすると，数学や理科などと同じように，音楽も知識のみを育成する教科として感じられるかもしれない。1960年代の教科書は，音楽理論の学習とは全く別の部分に歌唱活動や鑑賞活動についての内容が存在し，教師の技量によっては，音楽理論の学習とうまく関連させながら学習させることは可能だろうが，教科書の構成のみから考えると，音楽理論の学習と演奏・鑑賞はほとんど関連していない。

３点目は，２点目とも関連しているが，実際の音を扱う活動が軽視されていることである。現代の教科書では各演奏曲や鑑賞曲について，詳細な解説や学習すべき内容，目標が明らかにされているが，1960年代の教科書においてはそのような内容が見られなかった。音楽的に重要な作品が掲載されてはいるが，目的が明確ではない。つまり，実際の演奏や鑑賞を介して音楽的な感性や知識を身に付けようとはしていないことがわかる。

４点目は，「音楽と生活との関わり」に関する内容が掲載されていることである。プログラムにもあるように，音楽への愛好心を引き起こすような，「音楽と生活との関わり」についての学習が，少数ページではあるが，扱われている。この部分はほとんどが文章による説明であり，鳥の声を例に挙げながら，鳥の声を表すのによく使用される楽器（フルート，オーボエ，クラリネット）について紹介している。この１例ではあるが，生活の中にある音に耳を傾けようとする学びは，これまでの時代の教科書には見られなかったことである。この内容については，現代の教科書ではより充実している。

以上４点が教科書から見る1960年代の音楽科教育の内容に関する特徴であると言える。プログラムにおいては，音楽への愛好心を引き起こすことが大きな目的として掲げられていたが，実際の教科書では，愛好心を引き起こす可能性のある内容を扱ってはいるものの，全体的には認知主義的な内容に偏っている。また，プログラムにおいては，ファシズム崩壊からの国家再生のために，音楽を学ばせるというよりは，音楽を手段として学ばせるという精神主義的な流れを汲んでいることが明らかとなっているが，実際の教育内容には違いが見られる。1945年プログラムや1955年プログラムにおいて強調されていた，「歌は精神教育の手段である」ということは，1960年代の教科書の内容には見られず，認知的側面の強化に力を入れてはいるが，精神教育のために歌唱活動を用いようとする傾向にはない。つまり国力の増加のために，認知的側面を強化はしているが，音楽科を用いて精神教育を行っていたと

は，この教科書からは考えられない。

以上のことから，1960年代の音楽科教育は，1945年から始まるファシズム崩壊からの国家再生のための手段としての流れを汲んではいるが，傾向としては，1970年代後半からはじまる「音楽は生活と密着したコミュニケーションツールとして考えられた時代」への移行期にあったと考えられる。

1923年プログラムから音楽科（当時は唱歌科）は認知的側面を重視した内容を扱っていたが，ファシズムが崩壊してから，音楽科は精神教育の手段として扱われるようになった。しかし1960年代には，また認知的側面を重要視したものとなり，さらには音楽と生活との関わりについても注目するようになったのである。

6．おわりに

本論文では，1960年代の音楽科教育の内容を探るため，音楽科教科書をもとに考察を行った。その際に学習内容の特徴を見定める方法の１つとして，現代の教科書との比較を行った。イタリアはさまざまな出版社から教科書が出版されており，それぞれ特徴が異なっている。したがって今回は，イタリアでも大きなシェアを占めるLoescher社が出版したものを扱ったため，この時代の音楽科教育の内容に関してその一端をつかむことはできた。しかしながら，１社のみの内容では，1960年代の音楽科教育の全容を捉えるのに十分ではない。また，実際の教育活動がどのようにして行われていたのか，その実態は明らかではない。したがって今後は，実際の教育活動を知る手立てとして，当時の音楽科教育に関する雑誌などを扱い，音楽的に重要な国であるイタリアの音楽科教育の内容や教育システムを明らかにしていきたいと考える。

【注・および引用文献】

1）1962年12月31日の法律第1859号（Legge31 Dicembre 1962, n.1859）による。
2）ここでいう「プログラム」とは，日本での学習指導要領にあたるものである。
3）教科名は“Educazione musicale”と示されている。
4）大野内愛「イタリアの小・中学校における音楽科教育の変遷－1894年から現在までのプログラムに着目して－」『教育学研究科紀要』第二部（文化教育開発関連領域）第61号，広島大学大学院教育学研究科，2012，pp.333-342.
5）このときはまだ中学校が義務化されておらず，小学校のプログラムしか存在しない。
6）1955年プログラムには「易しくて芸術的な曲を聴くこと」という一言が存在している。
7）イタリアの教育・大学・研究省ホームページより訳出。
8）Lessona, L.-Quaranta, F., *Invito alla musica*, Loescher, 1968.
9）Duci, G., *Lo spartito animato*, Loescher, 2006.
10）Lessona, L.-Quaranta, F., 1968, op.cit., pp.96-97.
11）Ibid., p.80.
12）Ibid., p.109.
13）Duci, G., 2006, op.cit., p.16.